



村上春樹

国境の南、  
太陽の西

講談社

こつきょう みなみ  
国境の南、太陽の西

一九九二年一〇月二二日 第一刷発行

一九九二年一〇月二六日 第三刷発行

著者——村上春樹

© Haruki Murakami 1992. Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―三―三 郵便番号 三三〇―

電話

出版部(〇三)五三九五―三五〇四

販売部(〇三)五三九五―三六二二

製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所——株式会社精興社 製本所——黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部までお願いいたします。

国境の南、太陽の西

装  
幀  
菊  
地  
信  
義

僕が生まれたのは一九五一年の一月四日だ。二十世紀の後半の最初の年の最初の月の最初の週ということになる。記念的といえれば記念的と言えなくもない。そのおかげで、僕は「始（はじめ）」という名前を与えられることになった。でもそれを別にすれば、僕の出生に関して特筆すべきことはほとんど何もない。父親は大手の証券会社に勤める会社員であり、母親は普通の主婦だった。父親は学徒出陣でシンガポールに送られ、終戦のあとしばらくその収容所に入られていた。母親の家は戦争の最後の年にB29の爆撃を受けて全焼していた。彼らは長い戦争によって傷つけられた世代だった。

でも僕が生まれた頃には、もう戦争の余韻というようなものほとんど残ってはいなかった。住んでいたあたりには焼け跡もなかったし、占領軍の姿もなかった。僕らはその小さな平

和な町で、父親の会社が提供してくれた社宅に住んでいた。戦前に建てられた家でいささか古びてはいたが、広いことは広がった。庭には大きな松の木が生えていて、小さな池と灯籠まであった。

僕らが住んでいた町は、見事に典型的な大都市郊外の中産階級の住宅地だった。そこに住んでいるあいだに多少なりとも親交を持った同級生たちは、みんな比較的小綺麗な一軒家に暮らしていた。大ききの差こそあれ、そこには玄関があり、庭があり、その庭には木が生えていた。友だちの父親の大半は会社に勤めているか、あるいは専門職に就いていた。母親が働いている家庭は非常に珍しかった。おおかたの家は犬か猫かを飼っていた。アパートとかマンションに住んでいる人間を、僕はその当時誰一人として知らなかった。僕はあとになって近くの別の町に引っ越すことになったが、そこもだいたい同じような成り立ちの町だった。だから大学に入って東京に出てくるまで、通常の間人はみんなネクタイをしめて会社に通い、庭のついた一軒家に住んで、犬か猫を飼っているものだと僕は思い込んでいた。それ以外の生活というものを僕は、少くとも実感をともなっていない浮かべることができなかった。

大抵の家には二人か三人の子供がいた。それが僕の住んでいた世界における平均的な子供の数だった。少年時代から思春期にかけて持った何人かの友人の顔を思い浮かべてみても、彼らは一人の例外もなく、まるで判で押したみたいに二人兄弟か、あるいは三人兄弟の一員だった。彼らは二人兄弟でなければ、三人兄弟であり、三人兄弟でなければ二人兄弟だった。六人

も七人も子供がいる家庭は稀だったが、一人しか子供がいない家庭というのはそれ以上に稀だった。

でも僕には兄弟というものがただの一人もいなかった。僕は一人っ子だった。そして少年時代の僕はそのこととずっと引け目のようなものを感じていた。自分はこの世界にあってはいわば特殊な存在なのだ、他の人々が当然のこととして持っているものを、僕は持っていないのだ。

子供の頃、僕はこの「一人っ子」という言葉がいやでたまらなかった。その言葉を耳にするたびに、自分には何か欠けているのだということであらためて思い知らされることになった。その言葉はいつも僕に向かってまっすぐに指をきつけていた。お前は不完全なのだぞ、と。

一人っ子が両親にあまやかされていて、ひ弱で、おそろしくわがままでというのは、僕が住んでいた世界においては揺るぎない定説だった。それは高い山に登れば気圧が下がるとか、雌の牛は多量の乳を出すとかいうのと同じ種類の自然の摂理とみなされていた。だから僕は誰かに兄弟の数を訊かれるのが嫌でたまらなかった。兄弟がいないと聞いただけで人々は反射的にこう思うのだ。こいつは一人っ子だから、両親にあまやかされていて、ひ弱で、おそろしくわがままな子供に違いない、と。人々のそういったステレオタイプな反応は僕を少なからずうんざりさせ、傷つけた。しかし少年時代の僕を本当にうんざりさせ傷つけたのは、彼らの言うて



いるのがまったくの事実であるという点だった。そのとおり、僕は事実あまやかされて、ひ弱で、おそろしくわがままな少年だったのだ。

僕の通っていた学校では、兄弟を持たない子供は本当に珍しい存在だった。小学校の六年間を通じて、僕はたったひとりの子にしか出会わなかった。たったの一人だ。だから僕は彼女（そう、それは女の子だった）のことをとてもよく覚えていて、僕は彼女と親しい友だちになって、二人でいろんな話をした。心を通いあわせたといってもいいだろう。そして僕は彼女に愛情を抱きさえたのだ。

彼女の名前は島本さんといった。彼女もまた一人っ子だった。そして生まれてすぐに患った小児麻痺のせいで左脚を軽くひきずっていた。それに加えて彼女は転校生だった（島本さんが僕らのクラスにやってきたのは、五年生の終わりがらだった）。そんなわけで、彼女は僕なんか比べ物にならないくらい大きな精神的な重荷を背負っていたとも言える。しかし、おそらくより大きな重荷を背負っているぶんだけ、彼女は僕よりはずっとタフで自覚的な一人っ子だった。彼女は誰に対しても弱音をはかなかつた。口に出さないだけではなく、顔にも出さなかつた。何か嫌なことがあつても、彼女はいつも微笑みを浮かべていた。むしろ嫌なことがあればあるほど、彼女はその微笑みを浮かべるようにさえ思えた。それは素敵な微笑みだった。それはある場合には僕を慰めたり、あるいは励ましたりもしてくれた。「大丈夫よ」と彼女の微笑みは語っているように見えた、「大丈夫よ、ちょっと我慢すればこれも終わるんだから」。おかげ

でそのあとずっと、僕は島本さんの顔を思い浮かべるたびに、その微笑みを思い出すことになった。

島本さんは学校の成績も良かったし、他人には概して公平で親切だった。だから彼女はクラスの中でも常に一目置かれる存在だった。そういう意味では彼女は同じ一人っ子といっても僕とはずいぶん違っていた。でも彼女が級友たちに無条件で好かれたかという点、それは疑問だった。みんなは彼女を苛めたりからかったりはしなかった。でも彼女には、僕を別にすればということだが、友だちと呼べるような相手は一人もいなかった。

彼女はおそらく彼らにはクールで自覚的に過ぎたのだろう。それを冷たくて傲慢だと取るものだって中にはいたかもしれない。でも僕は島本さんのそうした外見の奥に潜んでいる温かく、傷つきやすい何かを感じ取ることができた。それはかくれんぼをしている小さな子供のように、奥の方に身を潜めながらも、いつかは誰かの目につくことを求めている。そういうものの影を、彼女の言葉や表情の中に僕はふと見いだすことがあった。

島本さんは父親の仕事の関係で何度も転校を繰り返していたということだった。彼女の父親がどんな仕事をしていたのか僕は正確には覚えていない。彼女が僕に一度詳しく説明してくれたのだが、まわりのおおかたの子供がそうであったように、僕は誰かの父親の職業なんてほとんど興味を持たなかった。たしか銀行とか税務署とか会社更生法とかそういうものに関係の

ある専門的な仕事だったと記憶している。彼女の越してきた家は社宅とはいってもかなり大きな洋風の家で、家のまわりには腰まである立派な石垣が巡らされていた。石垣の上には常緑樹の生け垣がついていて、ところどころにあいた隙間から、芝生の庭をのぞくことができた。

彼女は大柄で目鼻だちのはっきりした女の子だった。背丈は僕とほとんど変わらないくらいだった。それから何年かを経たのちには、彼女は人目を引かずにはおかないような見事な美人になる。でも僕が彼女と最初に出会ったとき、島本さんはまだ彼女自身の資質に合致した外観を獲得してはいなかった。その当時の彼女にはどことなくアンバランスなところがあって、そのせいで、多くの人々は彼女の容貌をそれほど魅力的だとは考えなかった。たぶんそれは、彼女の中の大人に相応しい部分と、彼女の中のまだ子供でありつづけようとする部分とがうまく連動して進んでいなかったからだと思う。そのような種類のバランスの悪さは時として人を不安にさせてしまうのだろう。

家が近かったせい（彼女の家は僕の家の文字通り目と鼻の先だった）、彼女は最初の一カ月間、教室で僕の隣の席を与えられた。僕は学校生活に必要な細かい手順をひとつひとつ彼女に教えた。教材のことや、毎週のテストのことや、それぞれの授業に必要な道具や、教科書の進み具合や、掃除や給食の当番のことなんかだ。いちばん近所に住んでいる生徒が転校生の最初のケアをするというのが学校の基本的な方針だったし、とくに彼女の場合は脚が悪かったので、先生は僕を個人的に呼んで、最初のうちしばらくは島本さんの面倒をよく見てあげなさい

と言ったのだ。

初めて顔を合わせた十一歳か十二歳の異性の子供たちがだいたいそうであるように、最初の何日かの僕らの会話はぎこちなく気詰まりなものだった。でも自分たちがどちらも一人っ子であるとわかってからは、僕らの会話は急速にいきいきとした親密なものに変化していった。彼女にとっても僕にとっても、自分以外の一人っ子と出会ったのはそれが最初だったからだ。だから僕は一人っ子であるというのがどういふことかについて、ずいぶん熱心に話し合うことになった。僕はそれについては言いたいことをいっぱい抱えていた。毎日というのではないけれど、僕は顔をあわせると二人で一緒に学校から家まで歩いて帰った。そして一キロちょっとの道をゆっくりと歩きながら（彼女は脚が悪かったからゆっくりとしか歩けなかった）いろんな話をした。話をしてみると、僕らの間にはずいぶんたくさんの共通点があることがわかった。僕は本を読むのが好きだった。音楽を聴くのが好きだった。猫が大好きだった。他人に対して自分の感じていることを説明するのが苦手だった。食べることでできない食品のいくぶん長いリストを持っていた。好きなことを勉強するのはちっとも苦痛ではなかったけれど、嫌な科目を勉強するのは死ぬほど嫌いだった。僕と彼女とのあいだに何か違いがあるとすれば、それは彼女が僕よりはずっと意識的に自己を護るための努力を行っているということだった。彼女は嫌な科目でも熱心に勉強してかなり良い成績を取っていたし、僕はそうではなかった。彼女は嫌いな食物が給食に出てきても我慢して全部食べたし、僕はそうではなかった。言

い換えれば、彼女が自分のまわりに築いていた防御の壁は、僕のものよりはずっと高く強かった。しかしその中にあるものは、驚くほどよく似ていた。

僕は彼女と二人でいることにすぐに馴れてしまった。それはまったく新しい体験だった。僕は彼女と一緒にいても、他の女の子といるときのようにそわそわと落ちつかない気持ちにはならなかった。僕は彼女と一緒に家まで歩いて帰るのが好きだった。島本さんは左脚を軽く引きずるようにして歩いた。途中で公園のベンチに座ってちょっと休むこともあった。でもそれを迷惑に感じたことは一度もなかった。むしろ余分に時間がかかることを楽しんでくらいだった。

我々はそんな風によく二人で一緒に時間を過ごすことになったのだが、そのことでまわりの誰かにかかわれたという記憶はない。その当時はとくに気にもとめなかったのだが、今考えしてみるとちょっと不思議な気がする。その年頃の子供というのは、仲の良い男女をからかったり、はやしたてたりするものだからだ。おそらくそれは島本さんの人柄によるものだろうと僕は思う。彼女の中にはまわりの人々に軽い緊張感を呼び起こす何かがあったのだ。要するに「この人に向かつてはあまりつまらないことは言えない」というような雰囲気彼女にはあったということだ。先生でさえ彼女に対してはときどき緊張しているように見えた。あるいは彼女の脚が悪かったこともそれに関係しているのかもしれない。いずれにせよ島本さんをからかったりするのはいささか適切なことではないとみんなは考えていたようだし、結果的にはそれは

僕にとってはあるがたいことだった。

島本さんは脚が悪いせいで体操の授業にはほとんど出なかった。ハイキングや山登りの日には学校を休んだ。夏の水泳の合宿みたいなものにも来なかった。運動会の日にはいささか居心地が悪そうだった。でもそのような場合を別にすれば、彼女はごく普通の小学生の生活を送っていた。彼女が自分の悪い脚を話題にすることはほとんどなかった。僕の覚えているかぎりではたぶん一度もなかった。僕と一緒に下校するときでも、「歩くのが遅くて御免なさい」というようなことは決して口にはしなかったし、顔にも出さなかった。しかし彼女が自分の脚について気にしていること、気にしているからこそ触れないようにしているのだということは僕にはよくわかっていった。彼女は他人の家に遊びに行くことをあまり好まなかったが、それは玄関で靴を脱がなくてはならないからだだった。彼女の靴は右と左で少しかたちや底の厚さが違って、彼女はそれを他人の目にさらすのが嫌だったのだ。おそらくそれは特別に作られた種類の靴なのだと思う。僕がそれに気づいたのは、彼女が自分の家に帰ると、何よりも先に靴をすぐに下駄箱にしまいこむのを目にしたときだった。

島本さんの家の居間には新型のステレオ装置があって、僕はそれを聴くためによく彼女の家に遊びに行った。それはかなり立派なステレオ装置だった。もともと彼女の父親のレコード・コレクションはその装置ほどには立派なものではなく、そこにあったLPレコードの数はせいぜい十五枚くらいだったと思う。そしてその大半は初心者向けのライト・クラシック音楽だっ

た。でも僕らはその十五枚ほどのレコードを何度も何度も繰り返し聴いてきた。だから僕はそれらの音楽を今でも、それこそ隅から隅までくつきりと思いつき出すことができる。

レコードを扱うのは島本さんの役だった。レコードをジャケットから取り出し、溝に指を触れないように両手でターンテーブルに載せ、小さな刷毛でカートリッジのごみを払ってから、レコード盤にゆっくりと針をおろした。レコードが終わると、そこにはほこり取りのスプレーをかけ、フェルトの布で拭いた。そしてレコードをジャケットにしまい、棚のもとあった場所に戻した。彼女は父親に教えこまれたそんな一連の作業を、ひとつひとつおそろしく真剣な顔つきで実行した。目を細め、息さえひそめていた。僕はいつもソファに腰掛けて、彼女の方を向いていつものように小さく微笑んだ。そのたびに僕は思ったものだった。彼女が扱っていたのはただのレコード盤ではなく、ガラス瓶の中に入れられた誰かの脆い魂のようなものではないのか。かっただろうかと。

僕の家にはレコード・プレーヤーもレコードもなかった。僕の両親はとくに熱心に音楽を聴くタイプではなかったのだ。だから僕はいつも自分の部屋で小さなプラスチックのAMラジオにかじりついて音楽を聴いていた。ラジオでは僕はいつもロックンロールやその類の音楽を聴いていた。でも島本さんの家で聴くライト・クラシック音楽も僕はすぐに好きになってしまった。それは「別の世界」の音楽だったし、僕がそれに引かれたのはおそらくその「別の世界」

に島本さんが属していたからだろうと思う。週に一度か二度、僕と彼女はソファーに座って、彼女のお母さんの出してくれた紅茶を飲みながら、ロッシニーの序曲集やベートーヴェンの田園交響曲や『ペール・ギュント』を聴いて午後の時間を送ったものだった。僕が家に遊びに来ることを、彼女の母親は歓迎してくれた。転校したばかりの娘に友だちができたことを彼女は喜んでいたし、僕がおとなしくていつもきちんとした身なりをしていたことも気に入ったのだと思う。もっとも正直に言って、僕は彼女の母親のことがどうも好きにはなれなかった。何か具体的な嫌なことがあったわけではない。彼女は僕に対していつも親切だった。でも彼女の喋り方の中にはちよつとした苛立ちのようなものが感じられることがあって、それがときどき僕を落ちつかなくさせた。

彼女の父親のレコード・コレクションの中で僕がいちばん愛好したのはリストのピアノ・コンチェルトだった。表に一番が入り、裏に二番が入っていた。僕がそのレコードを気に入ったのには二つの理由がある。ひとつにはレコード・ジャケットがとても美しかったからであり、ひとつには僕のまわりにいる人間でリストのピアノ・コンチェルトというものを聴いたことがある人間が誰ひとりとして——もちろん島本さんを別にしてだが——いなかったからだ。それは本当に胸がわくわくするようなことだった。僕はまわりの誰も知らない世界を知っている。それはいわば僕だけが中に入ることを許されている秘密の庭園のようなものだった。僕にとっては、リストのピアノ・コンチェルトを聴くことは、人生のひとつ上の段階に自分を押し



上げることには他ならなかった。

そしてまた、それは美しい音楽だった。最初のうち、それは大仰で、技巧的で、どちらかといえばとりとめのない音楽のように僕の耳には響いた。でも何度も聴いているうちに、まるでぼやけた映像がだんだん固まっていくみたいに、その音楽は僕の意識の中で少しずつまとまりのようなものを持ちはじめた。目を閉じてじっと意識を集中していると、その音楽の響きの中にいくつかの渦が巻いているのを見ることができた。ひとつの渦が生まれると、その渦からもひとつ別の渦が生まれた。そしてその渦はもうひとつの渦と結びついていった。それらの渦は、もちろん今になって思うことなのだけれど、観念的で抽象的な性質を持つものだった。僕はそのような渦の存在をなんとか島本さんに伝えたかった。でもそれは日常的に使っている言葉で他人に説明できる種類のものではなかった。それを正確に表現するためには、もっと違った種類の言葉が必要だったが、僕はそのような言葉をまだ知らなかった。そしてまた僕を感じているそういうものが、あえて口にして他人に伝えるだけの価値を持ったものなのかどうかもわからなかった。

リストの協奏曲を演奏していたそのピアニストの名前は残念ながら忘れてしまった。僕が覚えてるのは、カラフルで艶やかなジャケットと、そのレコード盤の重みだけである。レコードはミステリアスなまでにずっしりと重く、分厚かった。

クラシック音楽の他に、島本さんの家のレコード棚にはナット・キング・コールとビング・